

教養教育科目としての「キリスト教学」の意味と課題

文学部教授 佐藤 司郎

はじめに

本学に勤務し「キリスト教学Ⅰ、Ⅱ」を担当して十年が経過した。この教科には開学以来の長い歴史があり、また今後も「本学院教育の基本方針」（2006年7月、『時報』655号）にうたわれているように本学が存続するかぎり「正課必修」として教授されるはずのものだが、何を、どのように行なうかについては、必ずしも定められたものがあるわけではない。それはこの教科の存在を疑わしいものとする理由にはならず、かえって本学のミニストリーを担い、かつ本学の教養教育に不可欠のものとしてそれにたえず随伴し、時にリードし、その完成に貢献すべく、時代と状況の中で自己変革を遂げる必要と、内外からのその促しを意味するものであろう。振り返ってみればこの十年は私にとって、先輩の先生方の方法論に学び、同僚諸氏の、あるいはわれわれが長く継続している青山学院大学のキリスト教学の担当者たちとの交わりと共同研鑽などを通して、この教科がいかになされるべきか模索してきた年月であった。それはなお続いており、今日その努力がいつそう強く求められる時にさしかかっている。「キリスト教学」とは何か、それをどのように行なうかについて、日頃考えていることをこの機会に少し述べてみたい。

自己変革の課題は、むろん「キリスト教学」にだけあるわけではない。しかし「キリスト教学」にはただ制度面、あるいは教育技術面についてそれをすればよいというわけにはいかないものがある。なるほど教会ではなく教室においてであっても、聖書が説かれ、キリスト教について語られるからには、いつの時代も必要なら「語調を変えて」（ガラテア書4,20）語る努力をおしんではならないということがある。なぜそうかと言えば、その理由を社会環境、とくに学生および学生をめぐる教育環境の激変だけに求めることはできない。そうではなくてそうした変化を通してじつは神の語りの自明性が問われているということなのである。たとえばディートリヒ・ボンヘッファー(1906--1945)が1944年獄中書簡の中で「人間は、あらゆる重要な問題において、〈神という作業仮説〉の助けを借りることなしに自分自身を処理することを学んだ。・・・約百年来、このことは宗教的な問題にも加速度的にあてはまるようになった。いっさいは〈神〉なしにやれるし、しかも以前と全く同じようにうまく行くことが分かった」と書いて不可逆に進行する世俗化の事実を指摘し、それを受け入れた上で聖書の「非宗教的解釈」を提示したのは、すでに古典的事例に属する（『抵抗と信従』）。ただ誤解してならないのは、神について語ることが今日、いやいつも自明ではないということ（日本という風土においては

なおさら自明でない) は、神を語るというこのテーマ、この課題を放棄してよい、放棄しなければならないということの意味せず、かえってそれは神を意味深く語るチャンスでもあるということである。ボンヘッファーの思索もその方向を示していた。「キリスト教学」で教授されること、それが何であれ、それを学生にとって意味あるものとして語るための、まさにそうした努力が他の科目に比べてもなお強く求められているという意味で、自己変革はいっそう緊急なものだと言わなければならない。意味深く語るということはどういうことか、それも以下述べてみたいことのひとつだが、さしあたり一般的に言えば、意味深く語られるためには聞く側の問いがいっそう掘り下げられなければならないと言えるであろう。教授されるもの、それがいわば答えとして受け取られるためには問いが掘り下げられなければならないし、それは、答えとして示されたものもまた新たな問いとして受け取られることを意味する。「語調を変える」ことは聞き手の問いの掘り下げのことにほかならない。神の語りがこうした問いと答えの中になされるとすれば、教授されるものの一方的な伝達だけで済まないのは言うまでもない。パウル・ティリッヒ(1886--1965)は、福音主義(プロテスタント)の宗教の授業の任務はわれわれの福音主義キリスト教を他の宗派・教派と並ぶ一宗教と思わせることにあるのではない、そうではなくて「宗教的また世俗的なさまざまな形態にあらわれた人間の状況を、生徒に知られ理解されるかぎり、人間的なるものの限界からして明らかにすることにある」(『教育の神学』)、そのようにして宗教そのもの、キリスト教そのものが伝達されなければならないと述べている。これも結局のところ「意味深く語る」ことの一つの可能性だと私は理解している。「キリスト教学」が意味あるもの、魅力あるものでありつづけるために、それを願って、以下、「キリスト教学」の位置づけ、内容、意味と課題など考察する。

1. 「キリスト教学」の位置づけ

「キリスト教学」の位置づけを確認することからはじめたい。「キリスト教学」は第一に、キャンパス・ミニストリー(キリスト教教育)の最も重要な一部、すなわち中核、あるいはその手段として位置づけられ、第二に、教養教育の不可欠な一部として位置づけられる。

(1) キャンパス・ミニストリーの中核

ミニストリーという言葉にはむろん多様な意味があるが、キリスト教用語としては、第一に聖職者、第二に聖職者の仕事、ないし教会全体のつとめ(職制)、そして第三にそれらの奉仕そのものを意味する。それゆえにキャンパス・ミニストリーとはキリスト教大学の教育全体、ないしその教育的奉仕のことであって、どこか一部だけがそれを担っていると考えるのは正しくない。本来大学全体を通してなされていることであり、またなされるべきことである(倉松功『私学としてのキリスト教大学』)。その上で、第一に礼拝がキャンパス・ミニストリーの中

心を担うものであることは自明である。それだけでなく、聖書を説き、キリスト教を教えることもその重要な一部であることは大学の歴史そのものが示していることでもある。やってもやらなくてもいいものではない。それはキリスト教大学がはじめからそれを試み（金子晴勇『教育改革者ルター』）、日本のキリスト教学校が最初からしてきたことであった。それでもそれをキャンパス・ミニストリーの中核に置くということは、各教育機関の決断のことであり、その決断を本学が創立120年を機に「再確認」し「宣言」したことは幸いなことであった。つまり礼拝のみならず、それと並んで、それとの密接な関連において（時にそれへの準備として、あるいはその補完として）、しかし自立した教科目として「キリスト教学」が位置づけられていることは、本学の教育の基本目標の実現のための公の約束ごとである。「キリスト教学」は第一に、時代と共に変化する学問体系においてではなく、そうしたキリスト教大学の存在理由とその教育目標から理解され位置づけられなければならない。

本学の設置目的や教育目標についてここで取り上げる必要はない。ただ最低限確認しておきたいことはある。一つは、本学の教育の基礎としての「キリスト教による人格教育」に「キリスト教学」は関わるということである。これは言うまでもない。もう一つは、そうした人格教育について、聖書の人間観からはじめてきちんと解明すべきことはもちろんのこと（倉松功、前掲書）、まさに「自分探しが止まらない」（速水健朗）今日の日本の青年をめぐる状況の中で何を意味するのか、どのように行なうかについて議論を深めなければならないのではないかということである。そしてこれはまだ十分でない。——キリスト教的な人格は人間一人ひとりに向けられた神の愛の中で神が人間をご自身のパートナーとすることにおいて成立する。この人格は深い畏れにおいて神を愛する。神を愛するとは神が愛しているものをも愛することでもなければならない。そうでなければ神を愛していることにはならない。それゆえ彼は人間を兄弟として愛し、そのために祈り、連帯し、そして仕える。エーバハルト・ユンゲル(1934--)は「自分自身を失う者だけが自分自身に到達するであろう」という彼の神学的人間論の原則を律法ではなく約束として記した（『世界の秘義としての神』）。ここに人間の自己同一性獲得の道がある。「キリスト教学」は浮遊する今日の青年が真のアイデンティティを確立することに貢献する。超越者との関わりの中で真の自己を見いだした人間は、自らの存在の力を賜物として感謝しつつ受け取る。「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者はそれを救うのである」（マルコ8,35）。かくてキリスト教による人格教育は、人間がただ自分のためにだけ生きるのではなく、神のため、人のため、まさに「世のために」(for the world 本学モットーの一部)、その文化と福祉の前進のために生きる普遍的価値に開かれた人間の教育でもなければならない。

(2) 一般教育、教養教育の中で

「キリスト教学」が第一義的にはキャンパス・ミニストリーの中でとらえられるべきことは上に述べた。しかしそれだけでない。手許にある資料（『百年史』、「キリスト教学科四〇年史」）は、専門学校時代の教科目「聖書」から今日の「キリスト教学Ⅰ」「キリスト教学Ⅱ」まで、本学が開校以来、聖書を説くこと、キリスト教を教えることを、終始一貫、一般教育にとって、あるいは教養教育にとって不可欠のものと認識してきたことを示している。すでに言及した「本学院教育の基本方針」の宣言も「再確認」の上になされていることに注意しなければならない。その意味は何か、それはこの研究報告で少し説明したいことの一つだが、何よりもその事実をまずわれわれははっきり認識しておきたい。ただその上で、「キリスト教学科四〇年史」（出村彰氏執筆）を見ると、教養教育科目としての「キリスト教学」開講のため、その重要性のゆえに、従来非常な努力が重ねられてきたことをあらためて認識せざるをえない。個人的には「はじめに」に述べたようにこの十年いろいろ努力したことは間違いないが、担当者集団の相互の研究努力は十分ではなかったのではないかと率直に思わざるをえない。いくつかの例外はあるものの「失われた十年」でなかったか、反省を迫られる。「共通シラバス化」もそうした努力の一つだとしても、後で述べるように、これも十分なものではない。ともあれ、以下、一般教育・教養教育に位置づけられた「キリスト教学」がどのような変遷をたどったか、主なものだけでも一覧にして示しておこう。

キリスト教学の変遷一覧

専門学校時代 科目名「聖書」

大学設置以後 科目名「基督教学」、後に「キリスト教学」（Ⅰ、Ⅱ）

- 1949年～ 1～4年必修。総計（4年間で）4単位。この時期1、2年の授業時間は1コマ45分。残りは体育講義、グループ・アワーなどに充当。
- 1966年～ 1、2年必修、3年または4年に1度必修。1年は1グループ、2年以上は2グループで開講。
- 1974年～ 3年に、自由選択制を導入。
- 1993年～ 1、3年必修（2年の必修廃止）、各4単位。
- 1998年～ 1年、3年ともに2グループの開講。
- 2000年～ 3年の自由選択制廃止。
- 2006年～ 「キリスト教学Ⅰ」の共通シラバス化。
- 2006年 「本学院教育の基本方針」による「キリスト教学」の正課必修化宣言。

2. 「キリスト教学」の内容

次に、「キリスト教学」において何が教えられるべきか、取り扱われるべきか、その「内容」の問題を考えてみたい。

(1) 「二つの路線の相剋」

「キリスト教学科四〇年史」にいま言及したが、そこにはまた「キリスト教学」の「内容」についても担当者のあいだでくり返し真摯な議論のなされてきたことが証言されている。そして執筆者の総括的な判断によればこの問題で「二つの対極の間を揺れ動く」ことになったと言う。つまり一方の極には、主知的・知識重視的アプローチがあり、他方の極には、共感・共鳴を目標とする、いわば主体的アプローチがある。前者は「一定の量の知識の教授・伝達」を主眼とすべきとし、「キリスト教学」であれば「聖書の書名・十戒・主の祈り・使徒信条」のような「常識」を「教える」べきだとする。これに対して後者は、聖書の書名を全部おぼえさせるよりも「どの一箇所でも講義者自身の読み方を披瀝し、聖書の持つ現代へのメッセージを受講者自らが納得するように導くべきだ」と主張する。執筆者は結論として「少なくとも一見したところでは、あい矛盾する二つの路線の相剋を負い続けていかなければならないのではないだろうか」と述べているが、おそらくいまもこの結論に尽きると言ってよいであろう。日本のようなキリスト教的伝統をもたない伝道地において一定の知識の伝達がなければはじまらない。とはいえしかし、聖書を説く、キリスト教を教えるということは知識の伝達に尽きるものでもない。キリスト信者をつくることが「キリスト教学」の枠内で問題になりえないとしても、聞く者のハートに入っていない、自分たちの生活にそくさない伝達はそもそも伝達という名にも値しない。主知的であると同時に共感的な方法によってはじめて「キリスト教学」、とくにそのIはその目的を達成することになる。

ところでわれわれは数年前「キリスト教学I」について共通のシラバスを作成し、今日基本的にそれにのっっている。しばらくこれはつづけられるべきであろう。ただそれをじっさいの授業で具体化するさい、担当者自身のさらに詳細なシラバスの作成、提示を妨げるものではないし、そうした実践の中からもっとよいものを生み出していくことは今後必要なことである。そのことを考えながら、以下のことを書きとめておく。このシラバスは「旧約聖書」「新約聖書」「キリスト教史」「キリスト教教理」の4部門、旧約と新約を聖書として一つと数えれば3部門を通年に配置している。上に述べた「二つの対極」ということから見ると、前者に傾いていると見なさざるをえない。しかもキリスト教を伝達する側の視点から見ての区分、つまり伝道者養成機関（神学校）の教育の柱となる神学の現在の一般的な分け方（ただ肝心の実践部門、音楽や美術などもふくめた広い意味での実践部門を欠いている——礼拝への指針あるいは心構

えなどは最低限なければならない)に依拠している。したがって教育の一方の主体としての学生の側の視点、その状況が読み込まれたものにはなっていない。前項で確認したようにキャンパス・ミニストリーとしてと同時に教養教育の一部に位置づけられている「キリスト教」の構想としてはなお考慮の余地がある。しかるべき時において担当者間で再度しっかり議論をしなければならぬ。「知識伝達的」であり、かつ同時に「共感・共鳴的」ないし「主体的」というあい矛盾の二つの路線の「相剋」を負いつづけるために、よいシラバスが作成されることを期待したいし、これからも努力したい。

(2) 聖書を説く

「キリスト教学」の内容については、いずれにせよ聖書が中心に置かれるべきこと、このことはこれまでもそうであったし、現行シラバスもそうであり、今後もそうであるべきである。

このことで私の経験から思い起こすことの一つは、一昨年、フランスのテゼ共同体を訪ねたときのことである〔第二次大戦のさなかプロテスタントの聖職者ブラザー・ロジェ (1915--2005) によって創設された男子観想修道会。夏は一週間で五千人からの若者が世界中から訪れ、礼拝・黙想・労働などを通して研鑽と交わりの時をすごす〕。キャンプ場のような施設の中心にある大きな礼拝堂での一日三回の祈りはテゼのオリジナルの美しい賛美歌ではじまり、聖書朗読、それから長い黙想〔沈黙〕があり(説教はない)、その後もいくつかの賛美歌を歌って、祈りで終わる(『テゼの源泉』)。私が訪ねたときも礼拝には数百人の若者が参加していた。黙想が一つの特徴となっているが、大切なのは、参加者にどのように理解されているかは別にして、この黙想は聖書の言葉というはっきりした対象をもった黙想(イグナティウスの黙想)だということである。聖書が説き明かされないことの是非はともかく、ここでも出発点は神の言葉としての聖書である。それは他なる言葉として人間に到来する。それを聞くことからしか何ごともはじまらない(「信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによつてはじまる」ローマ10,17。なお、この「聞くこと」をルターは「説教」と訳した)。それがキリスト教という宗教の基本であり、「キリスト教学」においても同じく基本でなければならない。人は他なる言葉をとおして自己に到達する。「キリスト教学」で第一に伝えられ、教えられ、説かれなければならないのは聖書にほかならない。キリスト教を教会の宗教に代えて聖書の宗教としてはまさに宗教改革であり、プロテスタントイズムであった。それは、神の言葉、啓示としての聖書を土台にすえてキリスト教を再構築しようとした。それがわれわれが建学の精神である。上に述べた二つのアプローチが必要だと私も考えるが、聖書から出発すること、聖書を説くこと、これはいずれの方法においても第一のことでなければならない。

聖書以外の領域として、とくに「キリスト教学Ⅰ」で取り扱われるのはキリスト教の歴史である。現行シラバスに付加するとすれば、日本のキリスト教のことが取り上げられるべきであ

ろう。その中で、本学の歴史、その志のことも取り扱われる。キリスト教は伝道の宗教であり、日本の風土に受肉して今年プロテスタント宣教一五〇年を迎える。このキリスト教と日本との出会いにわれわれもあずかり、また学生たちもあずかる。この出会いがわれわれ日本人を新しい生き方へと転換するということが語られうる。こうしたことを全体の導入とすることもできるし、それは意味がある。いずれにせよキリスト教史の豊かな世界は「キリスト教学」の宝庫だと思う。

もう一つの領域は、共通シラバスでは「キリスト教教理」とされる部分である。これは取り扱いが少し難しいかも知れない。基本の教理は教えなければならない。福音主義（プロテスタント）とカトリックなど他の宗派との相違なども語られなければならない。そうでないとキリスト教がひどくあいまいなものという印象を与えかねない。世界観・人生観の形成の手がかりとなるためには、思想として整理して説明されなければならないのは言うまでもない。ただ私の場合はこの領域は最小限に抑えている。先ほどの「二つの路線の相剋」で言うと、ここでこそ後者のアプローチが必要であろう。ティリッヒの警告で言えば、福音主義（プロテスタント）キリスト教が何か他と並ぶ一つの教派であるかのような印象をいだかせたくないというものもある。聖書の教理はつねに信仰の経験を引照しつつ説明されなければ正しくは理解されないし、キリスト教がつまらない無味乾燥なものを受け取られかねないという問題もある。ここでこそ「使徒信条、十戒、主の祈り」が活用されるべきであろう。「日本基督教団信仰告白」のきわめて簡単な解説という形で展開した経験も私はもっている。

最後に、われわれの人生で出会うもろもろの問題が取り上げられてよいのではないだろうか。友情、結婚、人生、生と死、職業、学問、あげればきりがないけれども、こうしたことが、学生の生活、彼らの問いをいわば「注解書」として聖書を説く、対話的方法で語ることがよいと思う。かくて私の場合、前期で五つほどの領域（キリスト教と日本の出会い、聖書、歴史、教理、人生）を駆け足で取り扱い、後期でこれらの中から学生の関心も考慮していくつかのテーマにしばって、じっくり取り上げるということにしている。一つの参考として記しておく。

3. 「キリスト教学」の展開の視点、課題

日本キリスト教思想史の泰斗大内三郎(1913--1997)は植村正久の全体思想を問い、植村の活動についてこう分析している。一つはキリスト教の弁証、つまりキリスト教に対する偏見・誤解・無知に拮抗して、それを克服してキリスト教の真理そのものを正しく訴えること、もう一つは、キリスト教の真理そのものを述べるのではなく、むしろそれに立脚し国家・政治・倫理・教育・思想の現実問題について主張し、それによってキリスト教の立場を鮮明にすることである。これは外向化であるとすれば、さらに内向化という方向、つまりキリスト教の真理そ

のものの研究・把握ということがあった。そしてこれら全体が彼の思想であると（『植村正久論考』）。これは「キリスト教学」を行なう上でも、きわめて示唆するところ大きい。

(1) 偏見・誤解を解くこと

「キリスト教学」を担当して思うことは、学生はキリスト教に対して決して真っさらな状態にはいない、無宗教でもない（阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』）、そこには正しい知識や直観もないわけではないが、宗教というもの、キリスト教というものに対する、私から見れば誤解や偏見がはなはだしく多いということである。試験やレポート、あるいは教室でのやりとりなどを通して、たとえば彼らが「死後の世界」というようなものに何の違和感ももたない、それをつきつめて考えることもなく、何となくそれを「信じている」というようなこと、そのせいかどうか分からないが、命を大切にするというような通常の間感も薄らぎがちであること、あるいはそれに関連して因果応報、あるいは宗教といえはみな御利益宗教のようなものをこれも当たり前のようにして前提して考えているということ、これらを代表的な言説として、宗教、またキリスト教に対する少なくない数の偏見や誤解、そして無知に生きているということに遭遇する。ほとんどまっとうな取り扱いを受けなかった戦後の宗教教育の問題性もそこにはあり、カルト問題、あるいは最近のスピリチュアルブームの背景にもそれはあるであろう。いずれにしてもこれは世代を重ねて培われたエートスであり、それらは日本の精神風土そのものといってもよい（上田紀行『宗教クライシス』）。「キリスト教学」に課せられている課題は、まず第一にそうした偏見・誤解をていねいに解いていく、無知に対して正しい知識を伝えるということである。その上でキリスト教によって「もう一つの生き方」、いやもっと多様な生き方・考え方のあることを提示することであろう。教室での対話はもちろんのこと、とくに場合によっては読書レポートの提出などは、偏見・誤解を克服するいぜんとしてもっとも有効な手段の一つだと思う。私はレポートのために新書や文庫など、安価で、手に入りやすい、あまり大きくない書物のリストをいつもつくっておくようにしている。

(2) 倫理的なアプローチ

キリスト教の真理そのものを述べるのではなく、キリスト教の立場から文化的諸領域の現実問題を取り上げて主張するというのが、大内のあげた牧師・伝道者としての植村の二つ目の「外向的」活動であった。

それと同じく、とくに今日倫理的諸問題が「キリスト教学Ⅰ」でも取り上げられるべきではないだろうか。聖書を説くということは、換言すれば「福音」を説くということだが、そこには「戒め」を説くということも含まれる。福音は直説法だけでなく、命令法ももっている。倫理的な問題があちこちで噴き出しているこの時代、それらの問題との関連でキリスト教の真理を語ることも「キリスト教学」に期待されていることの一つだと私は考えている。むろんこの

ことは簡単なことではない。私が考えているのは、時々倫理的問題を取り上げて放談・批評するというようなことではない。そういうことも、とくにこの時代必要かも知れないが、教室でそれが必要か、適切か、可能か、考えてみる必要がある。おそらくそうすることによってキリスト教を一つのイデオロギー化してしまうことのほうが問題としてもっと大きいかも知れない。私が考えているのは、またじっさい試みているのは、たとえばボンヘッファーが「キリスト教倫理」について語っているようなことである。簡単に言ってしまうと、イエス・キリストの生き方を語るということである。ボンヘッファーによれば、「キリスト教倫理の問題は、キリストにおける神の啓示の現実性が、その被造物の中に現実化することである」(『現代キリスト教倫理』の中の「キリスト、現実、善」)。善についての問い、つまりいかにして私は善くなるか、いかにして善を行なうか、あるいは私の行為によって世界はいかにして善くなるか、といった問いはキリストにおいて、キリストの現実にもみその答えを見いだすことができる。「問題はイエス・キリストにおける神と世界の現実に今日あずかることである。したがって私は世界の現実を抜きにして神の現実を経験することも、神の現実を抜きにして世界の現実を経験することもない」。キリストの現実にあずかることへ向けて聖書のキリストが説かれなければならない。それは「まさっている義」(マタイ5,20)を追求することでもある。そのような観点から私もこれまで何度か、これは「キリスト教学Ⅱ」において、たとえば時にはカール・バルト(1886--1968)のテキスト(『キリスト教倫理』)なども用いて、人間の「生における自由」の問題として病気や健康の問題から死刑や戦争の問題までを取り扱ったことがある。

(3) 未来への共同責任

さて教養教育に果たす「キリスト教学」の役割、あるいは他の教養教育諸科目との関係についての考察は、「キリスト教学」の展開の視点・課題を考える上で不可避のテーマである。その十分な考察のためには「教養教育」とは何か、いやそもそも「教養」とは何かの議論から本来は始めなければならない。「教養」について従来通用してきた概念内容で共通理解の得られると考える人の少ない(佐々木俊三、本誌第8集)、その意味でもまさに「移りゆく『教養』」(荻部直)の時代にあって、それはますます必要であり、じっさいいろいろな形で行われつつあることは私が指摘するまでもない。ただいかながら、それらの論議を追跡してそれに加わる用意を筆者はいま持ち合わせていない。そこでここでは少し別の視点から問題を考えるおくことにする。

かつて「希望の神学」で名を知られた神学者ユルゲン・モルトマン(1926--)が「近代の諸学問の世界における神学」(『神学の展望』)などで論じたことは、「キリスト教学」が現に果たしている、また果たすべきことについて考えるいまも一つの手がかりとなるのではないだろうか。

モルトマンがそこで試みているのは、技術的理性の支配する近代において、自らが本来もっている全体への関心を放棄し、信仰と理性として「複線化」する近代精神の中であてがわれた「人間の内面性」に安住する神学を自己批判し、全体関心、世界責任をあらためて神学に呼びさますことである。こうした新しい神学概念の構想はイエス・キリストの十字架と復活の理解から与えられる。彼によれば、十字架と復活は「歴史の終わり」の先取りの開示にほかならない。歴史の終局的な危機と到来する神の国の世界変革をそれは示している。キリストの出来事によって神学が見て取るのは、裁きと救いの危機に直面している世界と人間の姿である。かくて「キリスト教神学はもうこれ以上、諸学問を向こうにまわし一つの前線に固執しそこにとどまっていることはできない。むしろ世界の救いが望まれ、滅びが恐れられるがゆえに、未来が勝ち得られるか、それとも虚しく終わるかがそこでこそ決定される私たちが現在と名づけるあの前線に、諸学問といっしょに赴く」。これがモルトマンの思い描くキリスト教神学の姿である。この神学は、諸学問と対話しつつ「共に旅する」。諸学問も、未来への責任において、神学と同じ課題をになっているのだから。しかし神学は諸学問に問いを提出することもやめない。それ自身に善の基準をもたない部分知・条件知として学問的〔科学的〕認識が歴史の全体に対してどのような責任を果たすのか、いかなる意味をもつのか、歴史の終わりを知る神学は問わないわけにはいかない。むしろ反対にキリスト教神学も共に歩む諸学問からの批判的問いかけを受ける。キリスト教信仰と神学がまさにその想起と待望とによって生きている神の国に今ここでふさわしく歩んでいるかと。そうした他からの問いかけに神学もつねに開かれていなければならない。「神学はあらゆる学問のあらゆる分野にあって責任に対する感覚と将来を見通す能力を研ぎ澄まさなければならない。何となれば神学の時は、パウロとともに『夜は更け、日が近づいている』（ローマ13,12）と語ることだから。終末論的信仰はただ諸学問と共にのみ歴史の今が何時かを自覚することができるのである」（傍点筆者）。

ここでモルトマンが示したキリスト教神学の新しい方向性は「キリスト教学」をわれわれが行なう上でも示唆するところ多い。「キリスト教学」も教養教育と共に、教養教育の中であって、歴史に意味をもたらす神の国を知り宣べ伝えることを許された不可欠の同伴者として歩むし、歩まなければならない。

結び

再び植村のことに戻ると、キリスト教を弁証し、キリスト教の真理に立って現実の諸問題に対して発言していくためには、同時に「内向的に」キリスト教の真理そのものの掘り下げが絶対不可欠であった。教養教育科目として質の高い講義・授業を行なうためには、担当者においてキリスト教のそれぞれの専門の研究の絶えざる研鑽が必要なことは、言うまでもない。私

も所属するキリスト教学科の存在の意味の一つはそこにあったし、いまもそこにある。他のキリスト教大学に比べても本学のミニストリーの最大の特色の一つはそこにあるといってよい。神学部を有する大学で専門研究をする人が「キリスト教学」に関わらない場合もめずらしくなく、反対に、十分な専門研究の場が確保されていないところも少なくない。そうした中で本学がその創立のはじめからキリスト教の専門研究と一般教育としてのキリスト教の教授を同時に同じ責任において行なう道を選択してきたのは、まことに見識に満ちたことであった。それによってはじめて本学の「キリスト教学」の質は保たれてきた。ただそうしたことに相応しく担当されているかということは、すでに一部述べたことでもあるけれども、もう一度吟味されてよい時にさしかかっている。この報告研究もそのためのささやかな貢献となれば幸いである。「キリスト教」という教科目の開講形態も担い手も今後時代とともに変わるであろうし、変わらざるをえない。しかしそこに込められた草創の志、それを継承した多くの先輩教職の思いは、これからも不変のままに次の時代に伝えられなければならない。

(2009年2月14日)